

ジャン・クリストフ

ロマン・ローラン

豊島与志雄訳

青空文庫

前がき

『ジャン・クリストフ』の作者ロマン・ローランは、西暦千八百六十六年フランスに生まれて、現在ではスイスの山間に住んでいます。純粋のフランス人の血すじをうけた人で、するどい知力をもっています。世界中のひと々がみなお互に愛しい、そして力強く生きてゆくこと、それが彼の理想であり、そして彼はいつも平和と自由と民衆との味方であります。

これまでの彼の仕事は、いろいろな方面にわたっています。第一に、五つの小説があり、そのなかで『ジャン・クリストフ』は、いちばん長いもので、そしていちばん有名です。ここに掲げたのはその中の一節です。第二に、十あまりの戯曲があり、そのなかで、フランス革命についてのものと信仰についてのもものが、重要なものです。第三に、十ばかりの偉人の伝記があり、そのなかで、ベートーヴェンとミケランゼロとトルストイとの三つの伝記は、もつとも有名です。第四に、音楽や文学や社会学や社会問題やそのほかにいろいろなものについて多くの評論があります。

彼はいま、スウイスの田舎に静かな生活をしながら、仕事をしつづけています。そして人間はどういう風に生きてゆくべきかということについて、考えつづけています。(訳者)

クリストフがいる小さな町を、ある晩、流星のように通りすぎていったえらい音楽家は、クリストフの精神にきつぱりした影響を与えた。幼年時代を通じて、その音楽家の面影は生きた手本となり、彼はその上に眼をすえていた。わずか六歳の少年たる彼が、自分もまた楽曲を作ってみようと決心したのは、この手本に基いてであつた。だがほんとうのことをいえば、彼はもうずいぶん前から、知らず知らずに作曲していた。彼が作曲し始めたのは、作曲していると自分で知るよりも前のことだったのである。

音楽家の心にとつては、すべてが音楽である。ふるえ、ゆらぎ、はためくすべてのもの、照りわたつた夏の日、風の夜、流れる光、星のきらめき、雨風、小鳥の歌、虫の羽音、樹々のそよぎ、好ましい声やいとわしい声、ふだん聞きなれている、炉の音、戸の

音、夜の静けさのうちに動脈をふくります血液の音、ありとあらゆるものが、みな音楽である。ただそれを聞きさえすればいいのだ。ありとあらゆるものが奏でるそういう音楽は、すべてクリストフのうちに鳴りひびいていた。彼が見たり感じたりするあらゆるものは、みな音楽に変わっていた。彼はちやうど、そうぞうしい蜂の巣のようだった。しかし誰もそれに気づかなかつた。彼自身も気づかなかつた。

どの子供でもするように、彼もたえず小声で歌っていた。どんな時でも、どういうことをしてる時でも、たとえば片足でとびながら往來を歩きまわっている時でも——祖父の家の床にねころがり、両手で頭を抱えて書物の挿絵に見入っている時でも——台所のいちばんうす暗い片隅で、自分の小さな椅子に坐つて、夜になりかかっているのに、何を考えるともなくぼんやり夢想している時でも——彼はいつも、口を閉じ、頬をふくらし、唇をふるわして、つぶやくような単調な音をもらしていた。幾時間たつても彼はあきなかつた。母はそれを気にもとめなかつたが、やがて、たまらなくなつて、ふいに叱りつけるのだつた。

その半ば夢心地の状態で、彼は動きまわって音をたてたくてたまらなくなつた。そういう時には、楽曲を作り出して、それをあらん限りの声で歌つた。

自分の生活せいかつのいろんな場合ばあいにあてはまる音楽をそれぞれこしらえていた。朝、家鴨あひるの子のように盥たらひの中をかきまわす時の音楽おんがくもあつたし、ピアノの前の腰掛こしかけに上つて、いやな稽古けいこをする時の音楽も——またその腰掛こしかけから下る時の特別とくべつな音楽おんがくもあつた。(この時の音楽おんがくはひとときわ輝かがやかしいものだった。)それから、母ははが食卓しょくたくに食物を運ぶ時の音楽おんがくもあつた——その時、彼は喇叭らっぱの音で彼女をせきたてるのだった。——食堂ふたおととから寝室しんしつに厳おごそかにやつていく時には、元氣げんきのいい行進曲マーチを奏そうした。時によつては、二人の弟ふたおととといつしよに行列ぎようれつをつくつた。三人は順々じゆんじゆんにならんで、威いばつてねり歩きある、めいめい自分の行進曲マーチをもつていた。もちろん、いちばん立派りっぱなのがクリストフのものだった。そういう多くの音楽おんがくは、みなびつたりとそれぞれの場合ばあいにあてはまっていた。クリストフは決してそれを混同こんどうしたりしなかつた。ほかの人なら誰たれだつて、まちがえるかも知しれなかつた。しかし彼は、はつきりと音色ねいろを区別くべつしていた。

ある日、彼は祖父そふの家いえで、そりくりかえつて腹はらをつき出し、踵かかとで調子ちようしをとりながら、部屋へやの中をぐるぐるまわつていた。自分で作つくつた歌うたをやつてみながら、氣持きもちが悪わるくなるほどいつまでもまわつていた。祖父そふはひげをそつていたが、その手てをやすめて、しゃぼんだらけな顔なまがをつき出し、彼の方なを眺ながめていった。

「何を歌ってるんだい。」

クリストフは知らないと答えた。

「もう一度やってみよう。」と祖父は言った。

クリストフはやってみた。だが、どうしてもさっきの節が思い出せなかった。でも、祖父から注意されているのに得意になり、自分のいい声をほめてもらおうと思って、オペラのむずかしい節を自己流にうたった。しかし祖父が聞きたいと思ってるのは、そんなものではなかった。祖父は口をつぐんで、もうクリストフに取りあわない風をした。それでもやはり、子供が隣の部屋で遊んでいる間、部屋の戸を半分開放しにしておいた。

それから数日後のこと、クリストフは自分のまわりに椅子をまるくならべて芝居へいった時のきれぎれな思い出をつなぎあわせて作った音楽劇を演じていた。まじめくさった様子で、芝居で見た通り、三拍子曲の節にあわせて、テーブルの上にかかっているベイトーヴェンの肖像像に向かい、ダンスの足どりや敬礼をやっていた。そして爪先でぐるつとまわって、ふりむくと、半開きの扉の間から、こちらを見ている祖父の顔が見えた。祖父に笑われているような気がした。たいへんきまりが悪くなつて、ぴたりと遊びを止めてしまった。そして窓のところへ走つていき、ガラスに顔を押しあてて、何かを夢

中で眺めてるような風をした。しかし、祖父は何ともいわないで、彼の方へやって来て抱いてくれた。クリストフには祖父が満足しているのがよくわかった。彼は小さな自尊心から、そういう好意がうれしかった。そしてかなり機敏だったので、自分がほめられたのをさとつた。けれども、祖父が自分のうちの何を一番ほめたのか、それがよくわからなかった。戯曲家としての才能か、音楽家としての才能か、歌い手としての才能か、または舞踊家としての才能か。彼はそのいちばんおしまいのものだと思いたかった。なぜなら、それを立派な才能だと思っていたから。

それから一週間たつて、クリストフがそのことをすっかり忘れてしまった頃、祖父はもつたいぶつた様子で、彼に見せるものがあるといった。そして机をあげて、中から一冊の楽譜帖をとり出し、ピアノの楽譜台にのせて、弾いてごらんといった。クリストフは大変困つたが、どうかこうか読み解いていった。その楽譜は、老人の太い書体で特別に念をいれて書いて書いてあった。最初のところには輪や花形の飾がついていた。――祖父はクリストフのそばに坐つてページをめくつてやっていたが、やがて、それは何の音楽かと尋ねた。クリストフは弾くのに夢中になつていて、何を弾いてるのやらさつぱりわからなかつたので、知らないと答えた。

「気をつけてごらん。それがわからないかね。」

そうだ、たしかに知っていると思つた。しかし、どこで聞いたのかわからなかった。……祖父は笑つていた。

「考えてごらん。」

クリストフは頭をふつた。

「わからないよ。」

ほんとうをいえば、思いあたることがあるのだった。どうもこの節は……という気がした。だがそうだとはいきれなかつた……いいたくなかつた。

「お祖父さん、わからないよ。」

彼は顔を赤らめた。

「ばかな子だね。自分のだということがわからないのかい。」

たしかにそうだとは思つていた。けれどはつきりそうだと聞くと、はつとした。

「ああ、お祖父さん。」

老人は顔を輝かしながら、クリストフにその楽譜を説明してやった。

「これは詠唱曲だ。火曜日にお前が床にねころんでうたつていたあれだ。それから、行進

曲。先週だったね、もう一度やってごらんといつても、思いだせなかつたらう、あれだ。それから三拍子曲。脇掛椅子の前で踊っていた時の歌だ。……みてごらん。」
表紙には、見事な花文字で、こう書いてあった。

少年時代の快樂——詠唱曲、三拍子曲、円舞曲、行進曲。ジャン・クリストフ・クラフト作品I。

クリストフは目がくらむような気がした。自分の名前、立派な表題、大きな帖面、自分の作品！これがそうなんだ。……彼はまだよく口がきけなかつた。

「ああ、お祖父さん！お祖父さん！……」

老人は彼を引寄せた。クリストフはその膝に身体を投げかけ、その胸に顔をかくした。彼は嬉しくて真赤になつていた。老人は子供よりもっと嬉しかったが、わざと平気な声で——感動しかかつてることに自分でも気づいていたから——いった。

「もちろん、お祖父さんが伴奏をつけたし、また歌の調子に和声を入れておいた。それから……（彼は咳をした）……それから、三拍子曲に中間奏部をそえた。なぜって……」

…なぜって、そういう習慣だからね。それに……とにかく、悪くなったとは思わないよ。」

老人はその曲を弾いた。——クリストフは祖父と一しよに作曲したことが、ひどく得意だった。

「でも、お祖父さん、お祖父さんの名前も入れなきやいけないよ。」

「それには及ばないさ。お前よりほかの人に知らせる必要はない。ただ……（ここで彼の声はふるえた）……ただ、あとで、お祖父さんがもういなくなつた時、お前はこれを見て、年とつたお祖父さんのことを思い出してくれるだろう、ねえ！ お祖父さんを忘れやしないね。」

憐れな老人は思つてることをすっかりいえなかつた。彼は、自分よりも長い生命があるに違いないと感じた孫の作品の中に、自分のまずい一節をはさみ込むという、きわめて罪のない楽しみを、おさえることができなかつたのである。けれども、今から想像される孫の光栄に一しよに加わりたいというその願いは、ごくつましい哀れなものだつた。彼は自分が全く死にうせてしまわないようにと、自分の思想の一片を自分の名もつけずに残しておくだけで、満足していたのである。——クリストフは、ひどく感動

して、老人の顔にやたらに接吻した。老人はさらに心を動かされて、彼の頭を抱きしめた。

「ねえ、思い出してくれね。これから、お前が立派な音楽家になり、えらい芸術家になって、一家の光榮、芸術の光榮、祖国の光榮となった時、お前が有名になった時、その時になって、思い出してくれるだろうね、お前を最初に見出し、お前の將來を予言したのは、この年とつたお祖父さんだつたということをおね……」

その日以来、クリストフはもう作曲家になつたのだから、作曲にとりかかつた。まだ字を書くことさえよく出来ないうちから、家計簿の紙をちぎりとつては、いろいろな音符を一生懸命書きちらした。けれども、自分がどんなことを考えているかそれを知るために、そしてそれをはつきり書きあらわすために、あまり骨折つていたので、ついには、何か考えてみようとするだけで、もう何も考えなくなつてしまった。それでも彼は、やはり楽句（楽曲の一節）を組み立てようとりきんでいた。そして音楽の天分がゆたかだったので、まだ何の意味も持たないものではあつたけれど、ともかくも楽句をこしらえ上げることができた。すると彼は喜び勇んで、それを祖父のところへ持つていった。

祖父は嬉し涙をながし——彼はもう年をとっていたので涙もろかった——そして、素晴らしいものだといってくれた。

そんなふうには、彼はすっかり甘やかされてだめになるところだった。しかし幸なことに、彼は生まれつき賢い性質だったので、ある一人の男のよい影響を受けて救われた。

その男というのは、ほかの人に影響を与えたりなどとは自分でも思っていなかったし、誰が見ても平凡な人間だった。——それはクリストフの母親ルイザの兄だった。

彼はルイザと同じように小柄で、痩せていて、貧弱で、少し猫背だった。年のほどはよくわからなかった。四十をこしている筈はなかったが、見たところでは五十以上には思われた。皺のよつた小さな顔は赤みがかつて、人のよさそうな青い眼が色のさめかけた瑠璃草のような色合だった。隙間風がきらいで、どこでも寒そうに帽子をかぶっていたが、その帽子をぬぐと、円錐形の赤い小さな禿頭があらわれた。クリストフと弟たちはそれを面白がった。髪の毛はどうしたのと聞いてみたり、父親メルキオルの露骨な常談におだてられて、禿をたたくぞとおどしたりして、いつもそのことで彼をからかっていた。すると小父はまっさきに笑いだし、されるままになつて少しも怒らなかつた。彼はちつぽけな行商人だった。香料、紙類、砂糖菓子、ハンケ

チ、襟巻、履物、缶詰、曆、小唄集、薬類など、いろんなものはいってる大きな
柵を背負って、村から村へと渡り歩いてた。家の人たちは何度も、雑貨屋や小間物屋な
どの小さな店を買ってやって、そこにおちつくようにすすめたことがあった。しかし彼は
腰をすえることが出来なかった。夜中に起上って、戸の下に鍵をおき、柵をかついで出
ていってしまったのだった。そして幾月も姿を見せなかった。それからまた戻ってきた。
夕方、誰かが戸にさわる音がする。そして戸が少しあいて、行儀よく帽子をとった小
さな禿頭が、人のいい目つきとおずおずした微笑と共にあらわれるのだった。「皆
さん、今晚は。」と彼はいった。はいる前によく靴をふき、みんなに一人一人年の順に挨拶
をし、それから部屋のいちばん末座にいつて坐った。そこで彼はパイプに火をつけ、
背をかがめて、いつものひどい悪洒落がすむのを、静かに待つのであった。クリストフ
の祖父と父は、彼を嘲りぎみに軽蔑していた。そのちっぽけな男がおかしく思われたし、
行商人という賤しい身分に自尊心を傷つけられるのだった。彼等はそのことをあ
からさまに見せつけたが、彼は気づかない様子で、彼等に深い敬意をしめしていた。その
ため、二人の気持はいくらか和いだ。ひとから尊敬されるとそれに感じ易い老人の方
は、殊にそうだった。二人はルイザがそばで顔を真赤にするほどひどい常談を浴せか

けて、それで満足した。ルイザはクラフト家の人たちの優れていることを文句なしにい
 つも認めていたから、夫と舅が間違っているなどとは夢にも思っていないかった。しかし、
 彼女は兄をやさしく愛していたし、兄も口には出さないが彼女を大切にしていた。彼
 等は二人きりでほかに身寄の者もなかった。二人とも生活のためにひどく苦勞して、やつ
 れはてていた。人知れず忍んできた同じような苦しみとお互の憐れみの気持とが、悲しい
 やさしきをもつて二人を結びつけていた。生きるように、楽しく生きるように頑固に出来
 上つてる、丈夫な騷々しい荒っぽいクラフト家の人たちの間にあって、いわば人生の
 外側か端っこにうち捨てられてるこの弱い善良な二人は、今までお互に一言も口には
 出さなかつたが、互に理解しあい憐れみあつていた。
 クリストフは子供によく見られる思いやりのない軽率さで、父や祖父の真似をして、
 この小さい行商人をばかにしていた。おかしな玩具かなんかのようにな彼を面白がっ
 たり、悪ふざけをしてからかつたりした。それを小父（小さい行商人）はおちつき払つて
 我慢していた。でもクリストフは、知らず知らずに彼を好いてるのだった。第一に、思う
 ままになるおとなしい玩具として、彼が好きだった。それからまた、いつも待ちがいのあ
 るいいもの、菓子とか絵とか珍らしい玩具などを持って来てくれるから、好きだった。こ

の小さい男が戻つて来ると、思いがけなく何か貰えるので、子供たちはうれしがった。彼は貧乏だったけれど、どうにか工面して一人一人に土産物を持って来てくれた。また彼は家の人たちの祝い日を一度も忘れることがなかった。誰かの祝い日になると、きつとやつてきて、心をこめて選んだかわいい贈物をポケットからとりだした。誰もお礼をいうのを忘れるほどそれに馴れきっていた。彼の方では、贈物をするのがうれしくて、それだけでも満足してゐるらしかった。けれど、クリストフはいつも夜よく眠れないで、夜の間に昼間の出来事を思いかえしてみる癖があつて、そんな時に、小父はたいへん親切な人だと考え、その憐れな人に対する感謝の気持がこみ上げて来るのだつた。しかし昼になると、また彼をばかにすることばかり考えて、感謝の様子などは少しも見せなかつた。その上、クリストフはまだ小さかつたので、善良であるといふことの価値が十分にわからなかつた。子供の頭には、善良と馬鹿とは、だいたい同じ意味の言葉と思われるものである。小父のゴットフリートは、その生きた証拠のようだった。

ある晩、クリストフの父が夕食をたべに町に出かけた時、ゴットフリートは下の広間に一人残っていたが、ルイザが二人の子供をねかしている間に、外に出てゆき、少し先の河岸にいつて坐つた。クリストフはほかにすることもなかつたので、あとからついていつた。

そしていつもの通り、子犬こいぬのようにじやれついでいじめた揚句あげく、とうとう息いきを切きらして、
 小父おじの足もとの草くさの上にねころんだ。腹はらばいになつて芝生しばふに顔をうずめた。息切れがとま
 ると、また何か悪わるくち口くちをいってやろうと考かんえた。そして悪口わるくちが見つかつたので、やはり顔
 を地面じべたに埋うずめたまま、笑わらいこけながら大おお声こゑでそれをいってやった。けれど何なんの返事へんじもな
 かつた。それでびつくりして顔かおを上げ、もう一度いどそのおかしな常じょう談だんをいってやろうと
 した。すると、ゴットフリートの顔かおが目の前まへにあつた。その顔かおは、金こん色じきの靄もやのなかに沈しず
 んでゆく夕日ゆうひの残りひかりの光ひかりに照あらされていた。クリストフの言葉ことばは喉のどもとにつかえた。ゴッ
 トフリートは目を半なかばとじ、口くちを少しあけて、ぼんやり微笑ほほえんでいた。そのなやましげな
 顔かおには、何なんともいえぬ誠せいじつ実じつさが見みえていた。クリストフは頬ほお杖づえをついて、彼みまもを見守まもり
 はじめた。もう夜よるになりかかつていた。ゴットフリートの顔かおは少しづつ消きえていった。あ
 たりはひっそりとしていた。ゴットフリートの顔かおにうかんでる神しん秘ひ的てきな感かんじに、クリス
 トフも引きこまれていった。地面じめんは影かげにおおわれており、空そらはあかるかつた。星ほしがきらめ
 きだしていた。河かの小波さざなみが岸きしにひたひた音をたてていた。クリストフは気きがぼうとして
 来きた。目めにも見みないで、草くさの小こさな茎くきをかみきつていた。蟋蟀こおろぎが一匹びきそばで鳴なっていた。
 彼かれは眠ねむりかけてるよような気き持もちだつた。

と突然、暗いなかで、ゴットフリートが歌いだした。胸の中で響くようなおぼろな弱い声だった。少しはなれてたら、聞きとれなかったかも知れない。しかしその声には、人の心を打つ誠がこもっていた。声に出して考えているのかと思えるほどだった。ちようど透きとおった水を通して見るように、その音楽を通して彼の心の奥底までも読みとられそうだった。クリストフはこれまで、そんな風な歌い方をきいたことがなかった。またそんな歌を聞いたこともなかった。ゆるやかな単純な幼稚な歌で、重々しい寂しげな、そして少し単調な足どりで、決して急がずに進んでゆく——時々長い間やすんで——それからまた行方もかまわず進み出し、夜のうちに消えていった。ごく遠いところからやって来るようでもあるし、どこへ行くのかわからなくもあった。朗かではあるが、なやましいものがこもっていた。表面は平和だったが、下には長い年月のなやみがひそんでいった。クリストフはもう息もつかず、身体を動かすことも出来ないで、感動のあまり冷たくなっていた。歌が終わると、彼はゴットフリートの方へはい寄った。そして喉をつまらした声でいいかけた。

「小父さん！……」

ゴットフリートは返事をしなかった。

「小父さん！」とクリストフはくりかえして、両手と顎を彼の膝にのせた。
ゴツトフリートはやさしい声でいった。

「何だい……」

「それ何なの、小父さん。教えてよ。小父さんが歌ったのなあに？」

「知らないね。」

「何だか教えとくれよ。」

「知らないよ。歌だよ。」

「小父さんの歌かい。」

「おれのなもんか、ばかな……古い歌だよ。」

「誰がつくつたの？」

「わからないね。」

「いつ出来たの？」

「わからないね。」

「小父さんの小さい時分にかい？」

「おれが生まれる前だ。おれのお父さんが生まれる前、お父さんのお父さんが生まれる前、

お父さんのお父さんのそのまたお父さんが生まれる前だ……。この歌はいつでもあつたんだよ。」

「変だね！ 誰にもそんなこと聞いたことがないよ。」

彼はちよつと考えた。

「小父さん、まだほかのを知ってる？」

「ああ。」

「もう一つ歌つて。」

「なぜもう一つ歌うんだい？ 一つで沢山だよ。歌いたい時に、歌わなくちやならない時に、歌うものなんだ。面白半分おもしろはんぶんに歌つちやいけない。」

「でも、音楽をつくる時はどうなの？」

「これは音楽じゃないよ。」

子供は考えこんだ。よくわからなかった。けれど説明してもらわなくてもよかった。

なるほど、それは音楽ではなかった。普通の歌みたいに音楽ではなかった。彼はいった。

「小父さん、小父さんをつくつたことある？」

「何をさ。」

「歌を。」

「歌？ どうして歌をつくるのさ。歌はつくるものじゃないよ。」

子供こどもはいつもの論法ろんぽうでいいはった。

「でも、小父おじさん、一度は誰だれかがつくったにちがいないよ。」

ゴットフリートは頑がんとして頭あたまを振ふった。

「いつでもあつたんだ。」

子供こどもはいい進すすんだ。

「だって、小父おじさん、ほかの歌を、新しい歌を、つくることは出来るできんじやないか。」

「なぜつくるんだ。もうどんなのでもあるんだ。悲かなしい時ときのめあれば、嬉うれしい時ときのめもある。

疲つかれた時ときのめあれば、遠いい家のことを思う時ときのめもある。自分自分がいやしい罪人つみびとだったから

とって、まるで虫むしけらみたいなのだったからとって、自分自分の身みがつくづくいやにな

った時ときのめもある。ほかの人が親切しんせつにしてくれなかつたからとって、泣なきたくなつた時とき

のめもある。天気がよくて、いつも親切しんせつに笑わらいかけて下さる神様かみさまのような大空おおぞらが見える

からとって、楽しくなつた時ときのめもある。……どんなのめ、どんなのめもあるんだよ。

何なんでほかのをつくる必要ひつようがあるものか。」

「偉い人になるためにさ……」と子供はいった。彼の頭は、祖父の教と子供らしい夢とで一ぱいになっていた。

ゴットフリートは穏かに笑った。クリストフは少しむつとして尋ねた。

「なぜ笑うんだい！」

ゴットフリートはいった。

「ああ、おれは、おれはつまらない人間さ。」

そして子供の頭をやさしく撫でながらきいた。

「お前は、偉い人になりたいんだね？」

「そうだよ。」とクリストフは得意げに答えた。

彼はゴットフリートがほめてくれるだろうと思っていた。しかしゴットフリートはきき

返した。

「何のためにだい？」

クリストフはまごついた。そして、ちよつと考えてからいった。

「立派な歌をつくるためだよ。」

ゴットフリートはまた笑った。そしていった。

「偉い人になるために歌をつくりたいんだね。そして、歌をつくるために偉い人になりた
いんだね。それじゃあ、尻尾を追つかけてぐるぐるまわってる犬みたいだ。」

クリストフはひどく気にさわった。ほかの時だったら、いつもばかりにしている小父から
あべこべにばかりにされるなんて、我慢が出来なかったかもしれない。それにまた理窟で自
分をやりこめるほどゴットフリートが利口だなどとは、思いもよらないことだった。彼は
やり返してやる議論か悪口を考えたが、思いあたらなかった。ゴットフリートは続けてい
った。

「もしお前が、ここからコブレンツまであるほど大きな人物になったところで、たった
一つの歌もつくれやすまい。」

クリストフはむっとした。

「つくろうと思っても……」

「思えば思うほど出来なくなるんだ。歌をつくるには、あの通りでなくちやいけない。お
きぎよ……」

月は野の向こうに昇って、まるく輝いていた。銀色の霧が、地面とすれすれに、また
鏡のような水面に漂っていた。蛙が語りあっていた。牧場の中には、美しい調子の笛

のような蟄がまのなく声が聞えていた。蟋蟀こおろぎの鋭い顫え声は、星のきらめきに答えてるかのようだった。風は静かに榛の枝をそよがしていた。河の向こうの丘からは、鶯うぐいすのか弱い歌がひびいてきた。

「いつたいどんなものを歌う必要があるのか？」ゴットフリートは長い間黙っていてから、ほつと息をしていった。——（自分に向かつていつているのか、クリストフに向かつていつているのか、よくわからなかった。——「お前がどんな歌をつくろうと、ああいうものの方が一そう立派りつぱに歌っているじゃないか。」

クリストフはこれまで何度も、それらの夜の声を聞いていた。しかしまだこんな風に聞いたことはなかった。本ほん当とうだ、どんなものを歌う必要があるか？……彼はやさしさと悲しみで胸が一ぱいになるのを感じた。牧場を、河を、空を、なつかしい星を、胸に抱きしめたかった。そして小父のゴットフリートに対して、しみじみと愛情を覚えた。もう今は、すべての人のうちで、ゴットフリートがいちばんよく、いちばん賢く、いちばん立派りつぱに思われた。彼は小父をどんなに見違えていたことかと考えた。自分から見違えられていたために、小父は悲しんでいるのだと考えた。彼は後悔の念にうたれた。こう叫びたい気がした。「小父さん、もう悲しまないでね。もう意地悪はしないよ。許しておくれ

よ。僕は小父さんが大好きだ！」しかし彼はいえなかった。——そしていきなり小父の腕の中にとびこんだ。言葉は出なかつた。彼はただくり返した。「僕は小父さんが好きだ！」そして心をこめて抱きついた。ゴットフリートはびつくりし、感動して、「何だ、何だ？」とくり返ししながら、同じように彼を抱きしめた。——それから彼は立上り、子供の手をとっていった。「もう家へかえろう。」クリストフは自分の気持が小父にはわからなかつたのではないかしらと、また悲しい気持になつた。しかし家のところまで来ると、小父はいった。「また晩に、お前さえよかつたら、一しよに神様の音楽をききに行こう。もつとほかの歌も歌つてあげよう。」そしてクリストフは、感謝の気持で一ぱいになつて、おやすみの挨拶をしながら、抱きついた時、小父がよくわかつてくれたのを見てとつた。

それ以来、二人は夕方、しばしば一しよに散歩に出かけた。黙つて歩いて、河に沿つていつたり、野を横切つたりした。ゴットフリートはゆつくり煙草をすい、クリストフは夕闇が怖くて、小父に手をひかれていた。彼等はよく草の上に坐つた。ゴットフリートはしばらく黙つてたあとで、星や雲の話をしてくれた。土や空気や水のいぶき、または闇の中にもうごめいてる、飛んだりはつたり泳いだりしている小さな生物の、歌や叫びや音

または晴天や雨の前兆、または夜の交響曲の数えきれないほどの楽器など、それらのものを一々聞きわけることを教えてくれた。時とすると、歌もうたってくれた。悲しい節の時も楽しい節の時もあったが、しかしいつも同じような種類のものだった。そしてクリストフはいつも同じ切なさを感じた。ゴットフリートは一晚に一つきり歌わなかった。頼んでも気持よく歌ってはくれないことを、クリストフは知っていた。歌いたい時に自然に出てくるのでなくてはだめだった。長い間待っていないなければならないことが多かった。もう今夜は歌わないんだ……とクリストフが思ってる頃、やっと小父は歌い出すのだった。

ある晩、ゴットフリートがどうしても歌ってくれそうもなかった時、クリストフは自分が作った小曲を一つ彼に聞かしてやろうと思いついた。それは作るのに大へん骨が折れたし、得意なものであった。自分がどんなに芸術家であるか見せてやりたかった。ゴットフリートは静かに耳を傾けた。それからいった。

「実にまずいね、気の毒だが。」

クリストフは面目を失って、答える言葉もなかった。ゴットフリートは憐れむようにいった。

「どうしてそんなものを作ったんだい。どうにもまずい。誰もそんなものを作れとはいわなかったらうにね。」

クリストフは怒って赤くなり、いいさからった。

「お祖父さんは僕の音楽をたいへんいいといってるよ。」と彼は叫んだ。

「そう！」とゴットフリートは平気でいった。「お祖父さんのいうことが本当なんだろう。あの人はたいへん学者だ。音楽のことは何でも知っている。ところがおれは、音楽のことはあまり知らないんだ。」

そして少し間をおいていった。

「だが、おれは、たいへんまずいと思うよ。」

彼はおだやかにクリストフを眺め、その不機嫌な顔を見て、微笑んでいった。

「何かほかに作ったのがあるかい？ 今のより外のものの方が、おれの気にいるかも知れない。」

クリストフはほかの歌が小父の感じをかえてくれるかも知れないと思って、あるだけ歌った。ゴットフリートは何ともいわなかった。彼はおしまいになるのを待っていた。それから頭を振って、ふかい自信のある調子でいった。

「なおまずい。」

クリストフは唇をかみしめた。顎がふるえていた。彼は泣きたかった。ゴットフリートは自分でもまごついているようにいいはった。

「実にまずい。」

クリストフは涙声で叫んだ。

「では、どうしてまずいというんだい？」

ゴットフリートはあからさまの眼つきで彼を眺めた。

「どうして……おれにはわからない……お待ちよ……じつさいまずい……第一、ばか
げているから……そうだ、その通りだ……ばかっている、何の意味もない……そこだ。そ
れを書いた時、お前は何も書きたいことがなかったんだ。なぜそんなものを書いたんだい
？」

「知らないよ。」とクリストフは悲しい声でいった。「ただ美しい曲を作りたかったんだ
よ。」

「それだ。お前は書くために書いたんだ。偉い音楽家になりたくて、人にほめられたく
て、書いたんだ。お前は高慢だった、お前は嘘つきだった、それで罰をうけた……そこ

だ。音楽では、高慢こうまんになつて嘘うそをつけば、きつと罰ばちがあたる。音楽は謙遜けんそんで誠実せいじつでなくてはならない。そうでなかつたら、音楽おんがくというのは何なんだ？ 神様かみさまに対する不信ふしんだ、神様かみさまをけがすことだ、正直しょうじきな真実しんじつなことを語るために、われわれに美しい歌を下くださつた神様かみさまをね。」

彼はクリストフが悲かなしがつてるのに気がついて、抱だいてやろうとした。しかしクリストフは怒おこつて横よこを向むいた。そして彼は幾いくにち日も不機嫌ふきげんだつた。小父おじを憎にくんでいた。——けれども、「あいつはばかだ、なんにも知るもんか！ ずっと賢かしこいお祖父じいさんが、僕の音楽おんがくをすてきだといつてくれてるんだ。」といくら自分でくり返かえしてみてもだめだつた。心の底そこでは、小父おじの方が正ただしいとわかつていた。ゴットフリートの言葉ことばが胸むねの奥おくに刻きざみこまれていた。彼は嘘うそをついたのがはずかしかつた。

それで、彼はしつっこく怨うらんではいたものの、作曲さつぎよく曲きょくをする時には、今ではいつもゴットフリートのことを考かんがえていた。そしてしばしば、ゴットフリートがどう思おもうだろうかと考えると、はずかしくなつて、書かいたものを破やぶいてしまうこともあつた。そういう気持きもちをおしきつて、全く誠実せいじつでないとなつてわかつている曲きょくを書くような時には、気きをつけてかくしておいた。どう思おもわれるだろうかとびくびくしていた。そしてゴットフリートが、「そ

んなにまずくはない……気にいった……」とただそれだけでもいつてくれると、嬉しくてたまらなかつた。

また、時には意趣がえしに、偉い音楽家の曲を自分のだと嘘をいつて、たちのわるい悪戯たずらをすることもあつた。そして小父がたまたまそれをけなしたりすると、彼はこおどりにして喜んだ。しかし小父はまごつかなかつた。クリストフが手をたたいて、喜んでまわりをはねまわるのを見ながら、人がよさそうに笑つていた。そしていつもの意見いけんをもち出した。「うまくは書いてあるかも知れないが、何の意味もない。」——彼はいつも、クリストフの家で催おされる小演奏会しょうえんそうかいに出席しゅつせきしたがらなかつた。その時の音楽おんがくがどんなに立派なものであつても、彼は欠伸あくびをしだし、退屈たいくつでぼんやりしてる様子ようすだつた。やがて辛抱しんぼう出来なくなり、こつそり逃げ出してしまふのだつた。彼はいつもいつていた。「ねえ、坊や、お前が家の中で書くものは、どれもこれも音楽おんがくじゃないよ。家の中の音楽は、部屋の中の太陽と同じだ。音楽は家の外にあるものなんだ、外で神様のさわやかな空気を吸う時ときなんか……。」

あとがき

クリストフはその後、偉い音楽家になりました。彼の音楽はいつも、彼の
 思想や感情をありのままに表現したもので、彼の心とじかにつながって
 るものでありました。そして彼がえらい音楽家になったのは、ゆたかな天分
 と苦しい努力とによるのですが、また幼い時にゴットフリートから受けた教
 訓は、ふかく心にきざみこまれていて、たいへん彼のためになりました。

青空文庫情報

底本：「日本少国民文庫 世界名作選（一）」新潮社

1998（平成10）年12月20日発行

底本の親本：「世界名作選（一）」日本少国民文庫、新潮社

1936（昭和11）年2月8日

入力：川山隆

校正：門田裕志、小林繁雄

2008年1月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ジャン・クリストフ

ロマン・ローラン

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 豊島与志雄訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>